

# 他人以上で家族未満

「定年になったが、地域に知り合いがない」「子どもは巣立ち、夫と2人で顔を突き合わせていたら息が詰まる」。団塊世代から、よく聞かれる悩みだ。そんな中、世代を超えて一部に共同生活を取り入れながら住むコレクティブハウジングという暮らし方が注目を集めている。

## コレクティブハウジング

### 集合住宅に共用空間

### 「定年後にぴったり」

「ただいま」「おかえり」。荒川区東日暮里3丁目にある賃貸の集合住宅「かんかん森」の平日の夜、住んでいる人たちが次々と共有のダイニングに集まってきた。仕事「コモンミール(食事会) 週3回食事会」この日は週に3回ある

### 団塊はいま

当番が夕食を用意し、地縁も血縁もない住民たちが任意で参加し、同じ食卓を囲む。かんかん森は普通のマンションのように各戸に分かれた住居部分のほか、住民が共同で使う36畳のリビングダイニングやランドリーなどがあるコレクティブハウス。0歳から80歳までの26世帯39人が暮らし

### NPO法人理事・宮前さんに聞く



コレクティブハウジング(CH)という暮らし方を薦めているNPO法人コレクティブハウジング社の宮前眞理子理事。写真にCHの現状や団塊世代との相性を聞いた。

### 夫婦の暮らし変える可能性

「多世代の隣人とのネットワークのなかで暮らし」というCHはそんな暮らしが現実だ。でも、それは住んだとたん近所付き合いがないことに気づく。最近では団塊の世代からCHについてNPOに寄せられる相談も多くなってきた。徐々に心や支持が高まってきている。団塊の多くの世帯では夫は高度成長やバブル経済を生きた企業戦士で、妻はそれを支えた専業主婦。会社生活しかなかった夫は定年後が不安だし、妻はずっと家にいる夫の面倒を見るだけの老後なんてゆづりなよう



コレクティブハウジング 集合住宅に住戸とは別に居間や食堂などの共用空間を作り、住人がプライバシーを保ちながらも食事の用意など生活の一部を共有する暮らし方。スウェーデンでは公営住宅として供給されている。日本では阪神大震災で住宅を失った高齢者への災害復興住宅に考え方が取り入れられた。かんかん森のような多世代型は今のところ珍しい。

クミさんは「夫と二人きりだったらいライラしていたと思う。ずっと専業主婦だったけど、ここではその経験がけっこう重宝がられる。こんなに生き生き生活できるとは考えたこともなかった」。

「定年後のスタートにぴったりだった。大手企業を03年に定年退職したに伴って入居したヒデオさん(63)、クミさん(59)夫妻は「仮名」は目を細める。ずっと転勤族で社宅を転々としてきたため、持ち家は無い。「マンションを買おうか」「でも60歳の夫婦が生活を始めても地域にはなじめない」「じゃあちょっと早いけど老人ホームに入ろうか。夫婦でそんな話をしている時、かんかん森のことを知った。「賃貸だからイヤなら飛び出せばいいと思って入ったんだけど、住んでみたら最高だった」とヒデオさん。ここでの入居者との関係は赤の他人ではないけれど、家族ほど濃密でもない。そんな距離感が心地よい。コモンミールに参加することもあれば、野球放送を見たいからと部屋で食べることもある。ヒデオさんは共有リビングで趣味の腹話術を披露し、クミさんは入居者とハイキングに行くことも。

「あの子が歩いたのよ」なんてことが夫婦の共通の話題にもなる。「もし普通のマンションに住んでたら、夕飯の時に話すこともなかった。夫妻は口をそろえた。かんかん森は居住者による自主管理で、電話での問い合わせは受け付けていない。連絡はファクス(03-38005-8000)、またはメール(member-morinoka@chc.or.jp)で

かんかん森のコンミール。もともとは赤の他人だが、多世代が楽しそうに食卓を囲んでいる。荒川区で